



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 293 号)

— 覚馬とゆく(1) —

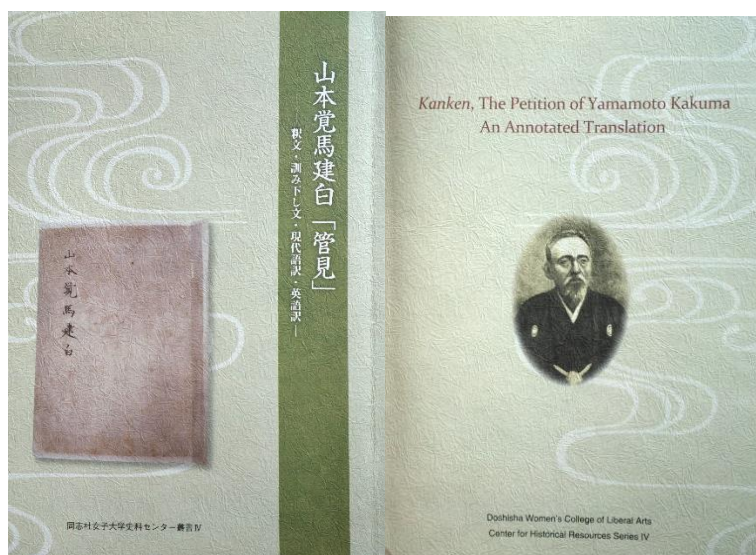
——山本覚馬建白『管見』を翻刻・翻訳して——

同志社女子大学表象文化学部 大島中正教授



【大島中正先生のプロフィール】

1958 年、大阪府生まれ。1986 年、同志社大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程を修了。京都イングリッシュセンター(現学校法人京都文化日本語学校)主任講師等をへて、1989 年、同志社に入社。専門は日本語学。主たる研究テーマは、日本語の基礎語彙、新島襄の言語生活、梅棹忠夫の日本語論。2019 年よりことわざ学会理事。2020 年より『同志社百五十年史』編纂委員会委員。



**2020 年 3 月、同志社女子大学史料センター発行の叢書Ⅳ**

**『山本覚馬建白「管見」—釈文・訓み下し文・現代語訳・英語訳—』**

**・山本覚馬の世界デビューをねがって**

わたくしは、同志社女子大学表象文化学部教員の大島中正ともうします。専門は日本語学。近現代日本語を主たる研究対象としています。

歴史学をおさめた者ではありませんが、2004 年度に同志社女子大学史料センター（当時の名称は同志社女子大学史料室）の運営委員に任命され、第 10 回企画展示「女子教育ハ社会ノ母ノ母ナリ」にかかわることになりました。それが、同志社の歴史についての初(うい)山ぶみであったと記憶します。その企画展示でのわたくしの任務は、創設期の同志社女学校に在籍していた、湯浅初子（徳富蘇峰・蘆花兄弟の実姉、湯浅八郎の母）・横井（海老名）みや（横井小楠の長女、横井時雄の実妹、海老名弾正の妻）・山本峯（山本覚馬の長女、横井時雄の妻）に関する史料を収集・選択し、目録の解説文を執筆することでした。いずれも NHK 大河ドラマ『八重の桜』（2013 年）に登場した人物です。

2020 年 3 月、その史料センター発行の叢書Ⅳとして『山本覚馬建白「管見」—釈文・訓み下し文・現代語訳・英語訳—』を公刊しました。翻刻・翻訳・注釈といった作業を、ジュリエット・カーペンター、枝澤康代、坂本清音、杉野徹、大島中正の 5 名でおこないました。約 8 年の歳月をついやすことになりました。われわれ 5 名は、同志社女子大学の英語英文学科または日本語日本文学科で教鞭をとった者（大島は現在も教鞭をとっています）で、同志社の歴史にアカデミックな立場から関心をよせている者です。英語訳の中心であるジュリエット・カーペンター名誉教授は、世界的に著名な翻訳家で、司馬遼太郎の『坂の上の雲』をはじめ多数の翻訳著があります。現在は、やはり司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を翻訳中ときいています。土佐の竜馬同様、会津の覚馬を、ぜひとも世界デビューさせたいというのが、

われわれ 5 名の念願です。世代をこえて山本覚馬に親近感をいただけるようにとおもい、訓み下文に対する現代日本語訳もこころみました。

### ・ドラマからも力をもらって

『八重の桜』は、わたくしも同志社を愛する一人であるという自負をもって、居ずまいをただして毎回視聴していました。とりわけ、第 49 回「再び戦を学ばず」での覚馬のセリフには胸をうたれました。

明治二十四年六月、同志社は 13 回目の卒業式を迎えた。

「諸君は学業を終え、これから、それぞれの仕事に就かれる。どうか、どんな時でも、貧しい人々の友となり、弱いも者を守る盾となってください。かつて、私は会津藩士として戦い、京都の町を焼き、故郷の会津を失いました。……その償いの道は、まだ半ばです……今、世界が力を競いあい、日本は戦に向けで動きだしている。どうか、聖書の一節を、心に深く刻んでください。……その剣(つるぎ)を打ち変えて鋤(すき)となし、その槍を打ち変えて鎌となし、国は国に向かいて剣を上げず。……二度と再び、戦うごどを学ばない」

覚馬は、壇上から卒業生たちに語りかけた。列席していた八重の胸が熱くなった。

「戦うことを、学ばない……」

これこそが、覚馬が探し求めていたものだったのだ。

「いかなる時も、諸君は一国の、いや世界の良心であってください。それが……身をもって戦を知る、私の願いです」

(山本むつみ作、五十嵐佳子ノベライズ (2013) 『八重の桜 四』NHK 出版 p.276)

ドラマと史実との混同があってはならないことは、いうまでもありません。しかし、表象文化学部の教員としては、実在するどのような史料がどのように脚色されてドラマがつむぎだされているのか。そういう問いをたてながら歴史をたのしみたいとおいいます。覚馬のこのセリフには、制作者のおもいが端的にこめられているようにおもわれますが、大胆な創作というわけではないようです。この点に関しては、本井康博著『囊のライフは私のライフ 新島襄を語る・別巻 (四)』(思文閣出版、pp.228-230、2014 年)をご参照ください。

### ・覚馬とゆこう！

山本覚馬がもし戊辰戦争で落命していたら、新島襄の志は挫折してしまっていたかもしれません。すくなくとも、同志社が京都の地に誕生することはなかったでしょう。「女子に

も教育を」と主張する覚馬が同志でなかったら、同志社女学校の誕生もおくれたかもしれません。いや、覚馬がいなければ、同志社の創設はもとより、京都の近代化そのものもおくれたかもしれません。

わたくしは、覚悟しました。連載という形式で、山本覚馬建白『管見』をよみといてゆこうと。日本人の言語生活、京都の近代化、女性優位文明、日本人の宗教等々、わが身の関心にひきつけて、随筆をつづってゆこうと決心しました。よろしくおねがいたします。■